

精神科医療におけるスピリチュアルケアについて  
—精神科医神谷美恵子氏のケアからの考察—

山田 和夫



# 精神科医療におけるスピリチュアルケアについて —精神科医神谷美恵子氏のケアからの考察—

山田 和夫\*

## Spiritual Care in Psychiatric Medicine — The Case of Psychiatrist Mieko Kamiya —

YAMADA Kazuo

In the last years of the twentieth century WHO tried to change the definition of health. Until recently, health encompassed biological, —psychological, —and social aspects. By the time the twentieth century was over, we have that there was more to health than that. So, WHO suggested an addition of spiritual aspect to the new definition of health. It is difficult to translate the word “spirituality” into Japanese. However, spirituality is very important in the psychiatric care. For example, people who experience spiritual pain or grief of loss need spiritual care. Also, resilience is important in the recovery process.

Dr. Mieko Kamiya was an excellent psychiatrist and a poet. After she contracted tuberculosis and recuperated alone, she fell into a deep depressive state and spent days of distress. In closed extreme situations, she had the mysterious experience of having her whole body bathed in divine light. She experienced the consciousness of a great natural power. Her spirituality and her resilience awoke. She recovered and maintained strong health through resilience and spirituality. Spirituality induced strong resilience. Spiritual care is important in difficult conditions.

**キーワード：** 神谷美恵子、神秘体験、魂、スピリチュアリティ、スピリチュアルケア

**Keywords :** Mieko Kamiya, Mysterious Experience, Spirit, Spirituality, Spiritual Care

---

\* 東洋英和女学院大学 人間科学部 教授  
Professor, Faculty of Human Sciences, Toyo Eiwa University

## I. はじめに

20 世紀末、WHO の健康の定義に、それまでの Bio-Psycho-Social モデルから Spiritual 概念が導入されるようになってきた（現在まだ保留中）。Spiritual Health を日本語にすることは難しいが、ターミナルケアにおいてはスピリチュアルペインに対してスピリチュアルケアの必要性が謳われるようになってきていて、実際に実践されている。同様に精神医療においてもスピリチュアルケアの重要性が認識されるようになってきた。一方、生体が有する自然な回復力、復元力を意味する Resilienc の認識が回復過程において重要な視点であることが主張されるようになってきた<sup>1) 2) 3)</sup>。Resilience は Bio-Psycho-Social 更には Spiritual な次元からの回復力を意味しているように思われる。21 世紀の精神医療を考えるにあたり、Spirituality と Resilience の認識が重要である。

## II. Spirituality とは

広辞苑によると「霊性と同じ」とある<sup>4)</sup>。「霊性」を引くと「宗教的な意識・精神性。物質レベルを超える精神的・霊的次元に関わろうとする志向。」とある<sup>5)</sup>。スピリット (Spirit) を引くと「①霊。靈魂。精霊。精神。②気性。気風。意気。」とある<sup>5)</sup>。靈魂は「魂」に繋がる。意気は「息」に繋がる。「魂」を引くと「①動物の肉体に宿って心のはたらきをつかさどると考えられるもの。古来多く肉体を離れても存在するとした。靈魂。精霊。たま。」とある<sup>6)</sup>。私のイメージする Spirituality は、この「魂」に近い。ある意味では「鬼」のように善悪も無く、力強い生命力を指し示している。鬼が云う言葉が「魂」でもある。鬼気迫る「気魄」とも言う。著名な精神科医神谷美恵子は、自身の文章を「鬼が云わせる」と言った<sup>7)</sup>。魂の次元から発せられる言葉という意味だろう。「言霊」という言葉がある。小林秀雄がよく用いたが、例えば本居宣長の文章を読んでいると、一文一文が言霊となって、本居宣長の生き生きとした言葉の響きが心に響いてくるという<sup>8) 9)</sup>。神谷

美恵子も小林秀雄も Spiritual な感性が高い人物と言う事も出来る。

先の WHO でイスラム圏の国々が中心となって発案して Spirituality を定義しようとした時、日本を含めて 30 カ国がワーキング・グループを作り討議されたが、最終案に対し米国が反対したため可決されず、保留となって現在まで続いている。その時、決議されていれば、21 世紀になって起こってきた深刻な宗教対立戦争・テロとの戦いは起きて来なかったかも知れない。ワーキング・グループの中で日本は、日本の代表的 Spirituality を示す著書として鈴木大拙の『日本的靈性』<sup>10)</sup>を挙げた。その本の中で、「霊性の意義」として「精神または心を物（物質）に対峙させた考えの中では、精神を物質に入れ、物質を精神に入れることができない。精神と物質との奥に、いま一つ何かを見なければならぬのである。二つのものが対峙する限り、矛盾・闘争・相克・相殺ということは免がれない。それでは人間はどうしても生きていくわけにいかない。なにか二つのものを包んで、二つのものがひきょうずるに二つでなくて一つであり、また一つであってもそのまま二つであるということを見るものがなくてはならぬ。これが霊性である。今までの二元的世界が、相克し相殺しないで、互譲し、交歓し相即相入するようになるのは、人間霊性の覚醒にまつよりほかないのである。いわば精神と物質の世界の裏にいま一つの世界が開けて、前者と後者とが、互いに矛盾しながらしかも映発するようにならぬのである。これは霊性的直覚または自覚より可能となる。」<sup>10)</sup>

うつ病に耐え抜くと、急に回復し大いなる喜びに浸るような神秘体験が神谷美恵子<sup>11) 12)</sup>の著書の中に書かれている。これが人間霊性の覚醒だろう。人間霊性が覚醒されると詩人（歌人）になったりする。神谷美恵子もその後、詩人（歌人）になる。宗教家になるために修行を積む事も、人為的な霊性の覚醒体験である。一度霊性の覚醒があるとずっと生涯続く様である。そして Spirituality が覚醒すると強い

Resilience が生じ、重い身体的病や、大きな精神的困難に対しても乗り越えてしまう。その様な強い精神力・回復力を有するようになる。

### Ⅲ. 神谷美恵子の Spirituality の覚醒

神谷美恵子は秀でた精神科医であり詩人であった。21 歳時、結核に罹患し孤独の中で療養していた際、深いうつ状態になり苦悩の日々を送っていた極限状況の中で、突然神々しい光を全身に浴び、大きな力に生かされているような喜びの体験をし、うつ状態も結核も完治するという奇跡的な神秘体験をする<sup>7)</sup>。その後、生まれ変わった「二度生まれる」と言い、極限的に苦悩している人のために生きていきたいと強く願うようになる。この神秘体験の後、Spirituality が覚醒したように、強い感動を「心の中の鬼が云わせる（正に魂の次元と思われる）」<sup>13)</sup> と言い、詩として表現するようになる。当時、人を最も絶望の淵に追いやった病「らい病」患者のための精神医療、研究のために生涯を捧げる。その「らい病」患者に対する精神療法は、正にスピリチュアルケアに通じる。スピリチュアルケアの方法論は観念的で明確にできない部分がある。神谷美恵子の自然で必然的で思いのこもった精神療法は、スピリチュアルケアの実際を考える貴重な実践となっている。しかも、その実践は神谷美恵子著作集として記録されている。神谷美恵子の人生と病跡を跡付け、その貴重な実践と著作から Spirituality とスピリチュアルケアについて考えたい。

### Ⅳ. 神谷美恵子の人生と病跡

神谷美恵子は 1914 年（大正 3 年）1 月 12 日、内務官僚前田多門・房子の第 2 子として父親の赴任先岡山で生まれた。兄の陽一とは 3 歳違い、2 男 3 女の長女として育つ。当時、父前田多門は岡山県の視学官をしていたが、翌大正 4 年内務省本省勤務となったため、一家して東京へ転居する<sup>14)</sup>。大正 9 年（6 歳）下落合小学校に入学する。父、東京市助役となる。この頃、両親が不和で「いつ母親がいなくなるか」「人

の心とはむずかしいものだ」「自分の心もむずかしいものだとはときづかされる」というような不安な気持ちを感じる日々があったという<sup>15) 16)</sup>。大正 10 年（7 歳）大久保百人町に転居、小学校も「村の小学校」から聖心女子学院 2 年に編入する。上流階級的な雰囲気と厳格な規律、更には 1 年年遅れて始めた英語についていけず様々な劣等感に苦しんだという<sup>14)</sup>。大正 12 年（9 歳）父が国際労働機関（ILO）の日本政府代表となったため、一家でスイス・ジュネーブに転居する事になった。美恵子にとってこれが大きな救いとなった。自由な気風で、学力より人間作りに力を入れていたジャンジャック・ルソー教育研究所付属小学校に編入する。再び伸びやかな学校生活を送るようになるが、ある時自分が逆に「富裕層」として同級生から見られている事に気付き、かつての自分の立場を顧みて「何とも申し訳ない」気持ちに苛まれたという。ジュネーブでは、両親の師で、当時国際連盟事務次長であった新渡戸稲造と交わる機会が多くあったという。新渡戸稲造も美恵子の人生に大きな精神的影響を与えた一人である<sup>15) 16)</sup>。大正 14 年（11 歳）国際連盟の創設に伴って、各国代表の子弟のために作られたジュネーブ国際学校中学部に兄と共に入学する。スイス時代、会話や教育は全てフランス語が中心でなされ、美恵子は日本語以上にフランス語をマスターし、物事も自然にフランス語で考えるようになったという<sup>16)</sup>。大正 15 年（12 歳）日本に帰国し、自由学園に編入学するも、校風にも日本語にもなじめず「不登校」になってしまう。結局、翌年新設されて間もない成城女学校高等部に転校する。この頃よりキリスト教無教会主義の伝道者で叔父の金沢常雄の聖書研究会に参加するようになる<sup>16)</sup>。昭和 7 年（18 歳）成城女学校を卒業し、兄の勧めで津田英学塾（現在の津田塾大学）本科に入学する<sup>17)</sup>。昭和 8 年（19 歳）叔父金沢常雄に連れられ、初めてらい病療養所多磨全生園を訪ねる。全生園内にある教会で叔父が説話する際のオルガン伴奏のためであった。初めてらいの患者を見て大

変な衝撃を受ける<sup>18)</sup>。当時「らい」は伝染性の不治の病とされ、また全身の神経・皮膚を侵し顔面や全身の皮膚が醜く爛れ見るものを恐怖に陥れた。そのため大変忌み嫌われ、発症すると「らい予防法」によって、生涯療養所に隔離収容された。家族も世間に知られる事を恐れ、戸籍からも末梢したりした。差別の温床となった「らい予防法」はつい最近まで存続し、患者達は社会からの強い偏見と差別の中に置かれ続けてきた。飼い殺しの状態に置かれ、死ぬまで療養所内に隔離され続けた。生きる目的、生きがいを奪われ、自殺者も多数出たという。「こんな病気があるものか。なぜ私達でなく、あなたの方が。あなた方は身代わりになってくれたのだ。」<sup>7)</sup>と心の中で叫んだ。「らいという病気について知らなかった者にとって、患者さんたちの姿は大きなショックであった。自分と同じ世に生を受けてこのような病におそわれなくてはならない人びとがあるとは。これはどういうことなのか、どういうことなのか。弾いている賛美歌の音も、叔父が語った聖書の話も、患者さんたちが述べた感話も、なにもかも心の耳には達しないほど深いところで、私の存在がゆさぶられたようであった。」(「らいと私」)<sup>17)</sup>そして「この人たちのためにどうしても看護婦か医者になりたい」<sup>12)</sup>と思うようになった。このことを両親に話したが、当然の事ながら両親は猛反対した。

昭和10年(21歳)津田英学塾本科を卒業し、同大学部に入学する。この年肺結核を発病する。<sup>18)</sup>当時肺結核は死の病だった。療養のため、軽井沢の別荘で一人暮らすようになる。孤独の中強うつ状態になり、数ヶ月寝たきりの状態になる。苦しい絶望の極地に置かれていた時、ある日自分の斜め上から神々しい光を浴びるという神秘体験をする。心の底から激しい喜びが沸き起こり、何かによって生かされていることを体感する。このような神秘体験はスピリチュアリティの覚醒を生じやすい。魂が強く揺り動かされるためと思う。彼女はその後、詩人となり聖女となる。スピリチュアリティ

の表現の一つが詩である。そのような詩人の詩は、人の魂に響き、感動させ、読む人を動かす。うつ状態から回復し、今度はエネルギーに英語の勉強に取り組んだりする。英語高等教員検定試験に合格し、結核も一旦治癒してしまう。生まれ変わった感じで「二度生きる」と、この時の感覚を表現している。この療養中、家族と親交のあったキリスト教教育者三谷隆正との文通が始まり、のちには直接会って教えを受けるようになる<sup>19)</sup>。

昭和11年(22歳)春、結核が再発し、再び軽井沢で療養生活に入る。しかし、精神的には今度は高揚状態にあったのか、「死ぬ前に人類が書いた偉大な書物なるべく読んでおきたいという大それた願望から」<sup>7)</sup>、病床でギリシャ語を独習して新約聖書、プラトン、ホメーロスを読み、更に、マルクス・アウレリウスの『自省録』などの世界の名著を全て言語で読破していく。昭和12年(23歳)気胸療法を受けて、結核は治癒する<sup>18)</sup>。津田梅子奨学金を受け、昭和13年(24歳)米国のプリンマー大学に籍を置き、ギリシャ文学を専攻する。クエーカーの学寮に入寮し、生涯の友となる浦口真左と出会う。この真左の助言で医学への道を決心をする<sup>19)</sup>。

昭和14年(25歳)5月、父親とニューヨークで開催されていた万国博覧会を見学に行く。その際、「公衆衛生医学」館の展示に釘付けになる美恵子の姿を見て、父親は医師になりたい思いを悟り、医学部の進学を許す。同年9月コロンビア大学医学部進学コースに転入学する<sup>20)</sup>。昭和15年(26歳)日米関係悪化のため日本に帰国し、昭和16年(27歳)東京女子医学専門学校(現在の東京女子医科大)に編入学する<sup>21)</sup>。昭和18年(29歳)5月、東京大学医学部精神科医局長の島崎敏樹と出会い、精神医学への興味をかき立てられる。同年8月、かねてから希望していた国立療養所長島愛生園で12日間実習を受ける<sup>22)</sup>。ずっと思い続けていたこともあり、その臨床実習は強い衝撃を受け、有名な「らいの人」という詩になっている。

光うしないたるまなこうつろに  
肢うしないたるからだになわれて  
診療台の上にどさりとせられた人よ  
私はあなたの前にこうべをたれる

あなたはだまっている  
かすかにほほえんでさえる  
ああ しかし その沈黙は ほほえみは  
長い戦いの後にかちとられたものだ

運命とすれすれに生きているあなたよ  
のがれようとて放さぬその鉄の手に  
朝も昼も夜もつかまえられて  
十年、二十年、と生きてきたあなたよ

なぜ私たちでなくてあなたが？  
あなたは代わって下さったのだ  
代わって人としてあらゆるものを奪われ  
地獄の責苦を悩みぬいてくださったのだ

ゆるして下さい らいの人よ  
浅く、家禄、生の海の面に浮かび ただよい  
そこはかとなく 神だの靈魂だのと  
きこえよいことばをあやつる私たちを

ことばもなくこうべたれば  
あなたはただだまっている  
そしていたましくも歪められた面に  
かすかなほほえみさえ浮かべている

Spirituality の覚醒した人は詩人になり易い。  
詩そのものが Spirituality の表現になっている。  
この詩は、長島愛生園のらい病患者に対する魂  
の叫びであり、スピリチュアルケアになっている。  
中でも下線部はスピリチュアルケアそのものである。

帰京する際には、園長に「また必ず戻ってきます」と挨拶している<sup>7)</sup>。しかし愛生園への就職は両親の強い反対で断念せざるを得ず、翌昭和 19 年 (30 歳) 東京女子医専を首席で卒業し、東京大学医学部精神医学教室に入局し、精神科

医となる<sup>22)</sup>。

昭和 21 年 (32 歳) 東京大学理学部植物学科講師の神谷宣郎と結婚し、神谷美恵子となる<sup>24)</sup>。二人の男児が生まれ、暫くは子育てに専念する<sup>23)</sup>。昭和 30 年 (41 歳) 子宮ガンが発見され、再び死を覚悟する。その時、「やりたいことをやらずに死ぬ」<sup>1)</sup> 無念の涙を流したという。しかしラジウム照射が奏効し治癒する。その思いを悟った夫宣郎から「らいをやったらいいじゃないか」<sup>7)</sup>と言われ、夫に感謝し人生の最大の目標だった「らい病」の患者のための仕事を始める事にした<sup>23)</sup>。当時芦屋に住んでいたが、昭和 32 年 (43 歳) 学生時代臨床実習をし、このらい病患者のために仕事していきたいと考え続けていた岡山県の離島にあるらい療養所「長島愛生園」の精神科非常勤医師に遂になる<sup>23)</sup>。正に初志貫徹である。以来、昭和 47 年 (58 歳時) まで、15 年間に渡ってらい病患者の精神的ケアにかかわるようになる。これは一種のスピリチュアルケアだった。

昭和 33 年 (44 歳) 学位論文「らいに関する精神医学的研究」を執筆<sup>24)</sup>。またジルボーグの『医学的心理学史』を訳し、みすず書房より出版する<sup>24)</sup>。この年の暮れ京都へゴッホ展を見に行った際、「自分の余生を『表現する』という使命に捧げるべき」という『啓示』を受ける<sup>25)</sup>。この事もあり昭和 34 年 (45 歳) 最も生きがいのもてない患者たちにどのようにして生きがいをもってもらおうかという臨床研究から『生きがいについて』の構想を始める<sup>25)</sup>。そして昭和 41 年 (52 歳) 畢竟の名著『生きがいについて』(みすず書房) が出版される<sup>26)</sup>。スピリチュアリチィの活性化の一面が「生きがい」を持って生きる事である事を論考している。美智子皇后が皇太子妃時代、精神的に悩まれていた際には、話し相手になられ、さりげなく支えられたという。これも一種のスピリチュアルケアだった。神谷は「頭の先から爪先まで優しさの詰まった方だった」<sup>1)</sup>という。溢れる慈愛によって苦しんでいる人を癒す事のできた聖女のような精神科医だった。



昭和 38 年 (49 歳) 兄陽一の紹介で、ミッシェル・フーコーに会い<sup>14)</sup>、強い影響を受ける。昭和 44 年 (55 歳) 訳書フーコー著『臨床医学の誕生』(みすず書房)<sup>27)</sup>、翌年にも訳本フーコー著『神経疾患と心理学』(みすず書房)を出版し<sup>27)</sup>、精神医学界に大きな影響を与える。

昭和 40 年 (51 歳) スイスの精神医学誌「コンフィニア」にヴァージニア・ウルフの病跡「ヴァージニア・ウルフの病誌素描 (“Virginia Woolf-An Outline of a Study on her Personality, Illness and Work”)」を公表<sup>26)</sup>している。当時、神谷はヴァージニア・ウルフを知り、その人生、精神性、作品に深く共鳴し、自身の人生と重ね合わせ、運命的な出会いの糸を手繰り寄せるように調査・研究を始める。実際に英国の生地を訪ね、夫レナド・ウルフにも面談し、以後生涯に渡って交流・研究を続けている<sup>27)</sup>。

この後も、湧き上がる強い思いから次々に著作が生まれ「神谷美恵子著作集全 10 巻・別冊 1 巻・補巻 1 巻」が刊行されるまでになる。夫には「自分の中に鬼がいて、その鬼が云わせる」<sup>7)</sup>と話している。鬼が云うとは、正に「魂」から発する言葉と言う事である。1971 年 (57 歳時) 初めて狭心症発作を起こす<sup>26)</sup>。以後、狭心症発作、TIA などのために 17 回入退院を繰り返す<sup>28)</sup><sup>29)</sup>。しかしそのような生命危機を与えるような病気に対しても怯む事無く、著述活動が続ける。昭和 53 年 (64 歳)『みすず』誌に「ヴァージニア・ウルフ病跡のおぼえがき」を連載する<sup>28)</sup>。昭和 54 年 10 月 22 日心臓発作を起こし、岡崎市立病院で亡くなる。『ヴァージニア・ウルフの病跡』は未完のままの死であった。享年 65 歳だった<sup>30)</sup>。

## V. おわりに：精神科医神谷美恵子のケア・スピリチュアルケア

Spirituality と Resilience の視点から神谷美恵子の人生を辿った。神谷は 21 歳時、肺結核に罹患し軽井沢で一人で療養生活を送るように

なる。その際、重度のうつ病になり一人もがき苦しむ生活を送る。その苦しみに耐え抜いた際、神々しい光を浴びるという神秘体験をする。その体験に依って一気にうつ病は治ってしまう。治るだけでなく、今まで以上に元気になる、精力的に活動するようになる。生かされている感覚を持ち、生きる大いなる喜びを感じるようになる。と同時に、結核も治ってしまう。これが、Spirituality の覚醒であり、Resilience の発現である。神谷の人生を見ると、その後ずっと精力的で、40 代で子宮ガンになるも生命力で克服し、50 代で狭心症、TIA、心筋梗塞を起こし 17 回も入退院を繰り返すがそのような生命に関わるような病的危機に対しても怯む事無く精力的な執筆活動を続けた。一度覚醒した Spirituality と Resilience は生涯続くようである。

神谷美恵子以外にも、難病に苦しみうつ病に耐え抜いた生命学者柳澤桂子も同様の人生を現在まで送っているし<sup>31)</sup>、アウシュビッツを生き抜いた V.E. フランクルは実存分析を確立し、「生きがい」と「生きる希望」と「どんなところにも生きる意味がある」と訴え続けた<sup>31)</sup>。G. G. ユングも、フロイトと離反した際に実存的な危機に陥り、2 年間実家の牧師館に引きこもり統合失調様状態を呈したが、砂場遊びから回復し、分析心理学を確立し、「魂」「集合無意識」の重要性を訴え、その後は大家族にも恵まれ、充実した人生を送り、現代まで多くの人の心を捉え多くの後継者を輩出している<sup>32)</sup>。これらの事例は全て Spirituality の覚醒と Resilience の発現に依るものと思われる。人生の救済において Spirituality の覚醒と Resilience の発現は一つの大きな基本的療法と思われる。これを基本として Spiritual Care は万人の基本的精神療法になると考えられる。



文献

- 1) 加藤敏、八木剛平編著『レジリアンス—現代精神医学の新しいパラダイム』金原出版、2009
- 2) 加藤敏編著『レジリアンス—文化・創造』金原出版、2012
- 3) 八木剛平、渡邊衡一郎編著『レジリアンス—症候学・脳科学・治療学』金原出版、2014
- 4) 新村出編著『広辞苑第6版』岩波書店：p1516、2008
- 5) 同上 p2983
- 6) 同上 p1756
- 7) 日本テレビ「知ってるつもり『神谷美恵子』」1996.5.26 内 神谷美恵子、夫神谷宣夫の言葉
- 8) 山田和夫、山田和恵：小林秀雄の病跡(1) 生活、日本病跡学雑誌 32：19-27、1986
- 9) 山田和夫：文学の中の Spirituality と癒し。日本病跡学雑誌 68：21-26、2004
- 10) 鈴木大拙『日本的靈性』岩波書店：p16-17、1972
- 11) 山田和夫：精神科医神谷美恵子の病跡と Spirituality。東洋英和女学院大学大学院紀要 6：1-6、2012
- 12) 山田和夫：Spirituality と病跡。日本病跡学雑誌 65：2-3、2003
- 13) みすず書房編集部：神谷美恵子年譜。みすず書房編集部編『神谷美恵子の世界』pp200、みすず書房、2001
- 14) 同上 pp201
- 15) 同上 pp202
- 16) 同上 pp203
- 17) 同上 pp204
- 18) 同上 pp205
- 19) 同上 pp206
- 20) 同上 pp207
- 21) 同上 pp208
- 22) 同上 pp212
- 23) 同上 pp213
- 24) 同上 pp214
- 25) 同上 pp216
- 26) 同上 pp217
- 27) 同上 pp218
- 28) 同上 pp219
- 29) 早川敦子：「存在」を追って—神谷美恵子とヴァーグニア・ウルフ」みすず書房編集部編『神谷美恵子の世界』pp132-149、みすず書房、2001
- 30) 柳澤桂子『癒されて生きる—女性生命科学者の心の旅路』P2、岩波書店、1998
- 31) 山田和夫『うつにならない・負けない生き方』サンマーク出版、2014
- 32) 山田和夫：神経症の治療史。松下正明編著『臨床精神医学講座 S1 巻 精神医療の歴史』p443-461、1999